

史 跡 斎 宮 跡

昭和60年度現状変更緊急発掘調査報告

昭和61年3月

明 和 町
三重県斎宮跡調査事務所

序

古代・中世史を考えるうえで貴重なわが国唯一の斎宮跡の大きな目標は、史跡の保護保存とそれを解明することはもちろんのことであります、140haに及ぶ広大な面積を住民生活との調和を計りながらどのように活用するかという重要な課題があります。

本町といたしましては、指定当時から斎宮跡の保存整備構想の中に博物館を目玉として位置づけをしており、関係機関に対して“ぜひ誘致を。”と強く働きかけをしてまいりました。その甲斐あって2月に県は、県文化審議会から『三重県における博物館構想』が答申されたのを受けて博物館を斎宮跡に建設することを決定しました。誠に喜ばしいかぎりであります。町もこれを機会に博物館に関わる道路及び周辺整備等の受け入れ事業に万全を期し、地域のより発展をめざしていきたいと考えております。

さて、この報告書は、昭和60年度に個人住宅の増改築等の現状変更許可申請が提出された中で、事前調査が必要であった8件の発掘調査結果をまとめたものであります。これらは小規模ながらも点在した場所から貴重な資料を得ることができるものであり、計画調査と違った現状変更の特長と言えましょう。これらの蓄積により、斎宮跡の姿がより明確になることを期待するものであります。

最後に、発掘調査にご理解ご協力いただいた地元の方々や、発掘調査及び報告書の作成を担当していただいた三重県斎宮跡調査事務所並びに関係各位に対して深甚の謝意を表する次第であります。

昭和61年3月

明和町長　辻　英輔

例　　言

1. 本書は明和町が昭和60年度国庫、及び県費の補助金の交付をうけて実施した史跡斎宮跡の現状変更緊急調査の結果をまとめたものである。
2. このうち第58-3・5・8次の発掘調査はそれぞれの原因者が費用を負担した調査である。
3. 調査は明和町（斎宮跡保存対策室主管）が調査主体となり、三重県斎宮跡調査事務所が担当した。
4. 発掘調査・整理および本書の作製には、斎宮跡調査事務所の山沢義貴、倉田直純、杉谷政樹、泉雄二があたり田中久生、刀根やよい、坂真弓美、若林真登、松田早苗、がこれに協力した。
5. 遺構実測図、遺構表示等は、全て三重県斎宮跡調査事務所刊行の調査概報に準じている。

目 次

1. 前 言.....	1
2. 第58-1次調査.....	2
3. 第58-2次調査.....	5
4. 第58-3次調査.....	6
5. 第58-4次調査.....	9
6. 第58-5次調査.....	11
7. 第58-6次調査.....	12
8. 第58-7次調査.....	14
9. 第58-8次調査.....	15



fig. 1 発掘調査箇所位置図 (1 : 10000)

1. 前　　言

史跡斎宮跡の発掘調査は、ここに報告をする現状変更に伴う事前調査と、計画的面調査のいわば2本立て実施している。

計画調査については、今年度は、昭和63年度中に行う保存管理計画の見直しに対応するため、通称中町裏と呼ばれる第2種保存地区で集中して行ってきた。

現状変更に伴う本年度の許可申請件数は39件であった。このうち発掘調査を実施したものは8件で、調査面積は1,260m²であるが、このなかには明和町単独事業である小学校校庭整備に伴うものと、町道側溝新設に伴うもの、及び近鉄が行った保全柵新設に伴うもの合わせて、246m²も含まれている。

調査を実施した場所は、近鉄線北側では、第2種保存地区で2件のほかは、近鉄線より南の住宅が連担する第3種保存地区および第4種保存地区であった。通称木戸の世古に面する第58-1次調査では、柱通りを描えた平安時代前期、および後期の掘立柱建物を検出した。また、牧川沖積地をのぞむ、台地西端部の第58-4次調査では、弥生時代前期および中期の遺構のほか、時期は明確に推定できないものの大型の柱揚げを持つ方位にのる掘立柱建物および塀を検出し、従来の古里地区で検出した掘立柱建物と様相が異なる遺構として特に注目された。また、これまで調査を実施することの少なかった中町地区の第4種保存地区でも第58-7次調査をおこない、小面積ながら、掘立柱建物、土塁等を検出した。

以上のように、現状変更に伴う調査は小規模な調査であるが、これらの調査によって集積されるデータは、計画調査を補ってあまりある貴重な資料である。今後地元の理解を得ながら1件あたりの調査面積を増やし、史跡の解明に努めたい。

年　度	現　状　変　更 申　請　数	発　掘　調　査 件　数	調　査　面　積	補　助　金　事　業 調　査　件　数	補　助　金　事　業 調　査　面　積
54	33	17	3,968	12	996
55	60	12	1,281	10	815
56	53	12	5,416	10	696
57	50	8	657	7	577
58	52	16	3,757	10	1,440
59	30	15	2,884	12	1,589
60	39	8	1,260	5	1,014

2. 第58-1次調查 (6 A FK-C・D)

調査場所	明和町斎宮字西加座2721-1
原 因	盛土
調査主体	明和町
調査担当	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和60年4月23日～5月4日
調査面積	186m ²

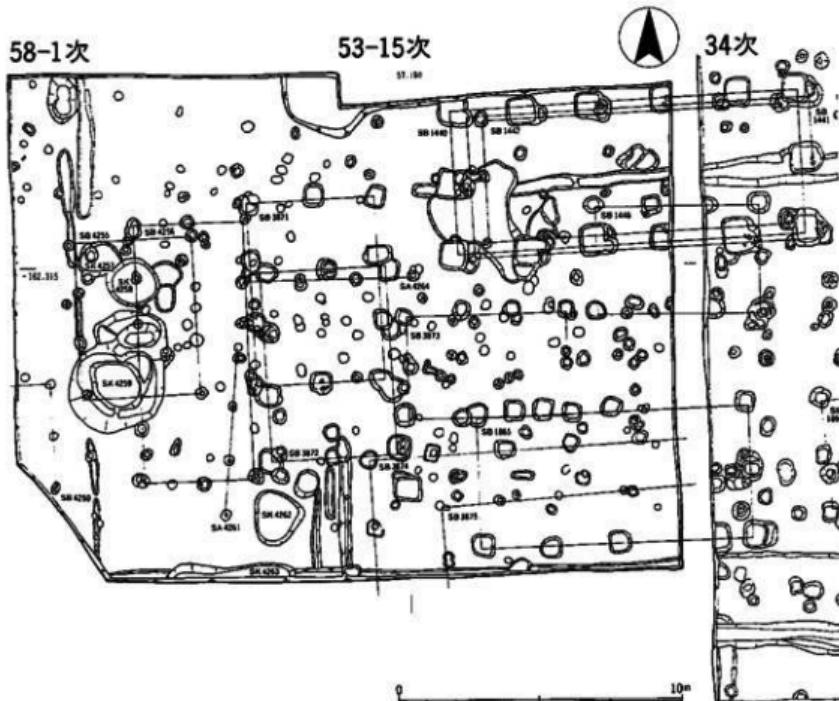


fig. 2 遺構実測図 (1 : 200)

1) はじめに

昭和59年度末に第53-15次調査で東半の調査を行った同一申請地の西半残り部分の調査である。当調査地は、昭和55年度の第34次調査、昨年度の第53-15次調査など、近辺の調査により、既に、平安時代における斎宮の中でも、主要な一画を占める場所である。

東西11.5m、南北17.5mの調査区を設定して調査を行った。

2) 調査概要

調査区の基本的層序は、第53-15次調査と同様である。道路に面した西側断面では、耕土(15cm)、黄茶褐色土(18cm)、黒色土(12cm)、黄褐色土及び黄白色粘質土となっており、黄褐色土以下が地山で、地山上面は標高約9.2mである。

遺構は一部黒色土上面で確認できるものもあったが、湧水が激しく、地山まで掘り下げて遺構検出を行った。

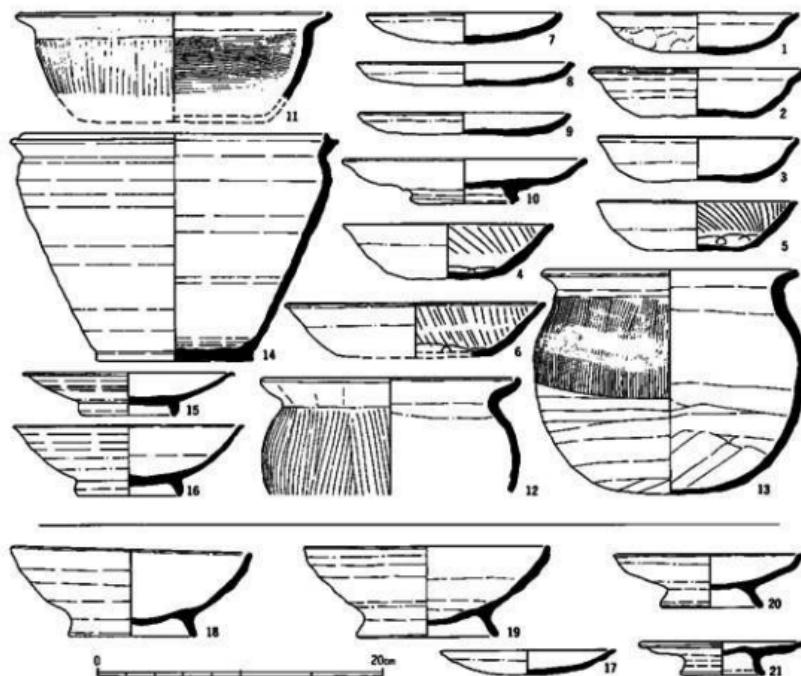


fig. 3 遺物実測図 (1 : 4) SB3874西部包含層一括; 1~16
SB3875付近包含層一括; 17~21

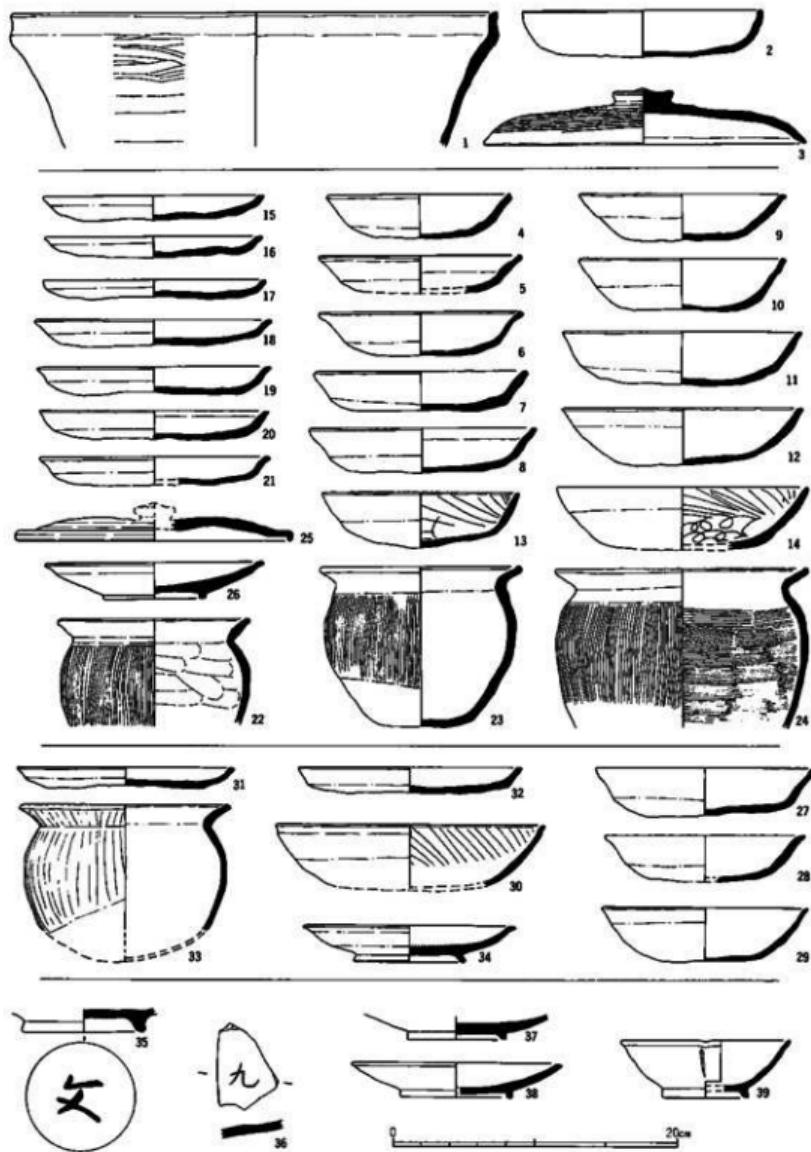


fig. 4 造物実測図 (1:4) SB3873西部包含層一括; 1~3、SK4259; 4~26、SK4262; 27~34、包含層; 35~39

その結果、第53-15次調査検出の平安時代前期SB3871・SB3872の西半部を確認した。いずれも方形の柱櫛形をもち、N2°Wを示す南北棟で、3間×2間の桁行6.5m、梁行4.4mの同規模の建物であった。SB3871はSB1440の棟通りに北妻柱通りを據え、SB3872はSB1441の南側柱通りに北妻柱通りを据えて直交する位置に建てられており、SB1440・SB1441に從属性の性格のものと推測される。

これより西の建物は、いずれも柱の櫛形が円形の径30~40cm程度のものになる。

SB4255・SB4256は遺物より平安時代後期の建物と考えられる。また、SB4260は遺物は出土しなかったが、建物の方向がN3°Wで、SB4256と據うものであり、おそらく平安時代後期に属する建物であろう。

また、平安時代前期の塙が2条検出されたが、SA4264はE1°N、SA4261はN4°Eで、付近の建物との関連は明確ではない。

遺物としては、土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、黒色土器などがあり、なかに包含層から「文」の墨書きのある黒色土器、底部外面に「九」のヘラ書きのある綠釉陶器がある。

以上のように、平安時代前期の主要な殿舎とみられるSB1440→SB1442→SB1441の建物を中心とする一連の建物群の西部にあたる部分の状況を把握することができた。

3. 第58-2次調査(6AFH-N)

調査場所 明和町斎宮字西加座2681-8

原 因 個人住宅新築

調査主体 明和町

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和60年5月18日~5月21日

調査面積 50m²

1)はじめに

中町集落北部を南北に走る、通称木戸口道と呼ばれている道路に面する場所である。標高はおよそ10.4m。付近は、近年宅地化が進み、いくつかの現状変更を実施してきた。今回の場所も既に北側と南側には住宅が建っており、第37-12次調査や、第13-11次調査

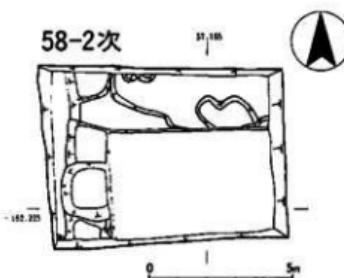


fig. 5 遺構実測図(1:200)

などを実施している。

これまでの調査から、道に面する部分は、道から西へ約8~10mの幅で、土取り（瓦用の粘土採掘）されていることが判明している。

東西8m、南北6mの調査区を設定した。

2) 調査概要

既に、厚さ50cmほどの盛土がされていたため、ユンボでこれを排土したのち、調査を実施した。

なお、調査途中、調査区の大部分が既に土取りされていることが確認されたので、全面掘るのをやめ、幅2mのL字形のトレンチ調査に変更した。

遺構面（標高9.4m）は調査区の西端でわずかに認められたのみで、ここでも、道に面する部分は土取りされており、遺構、遺物とも検出できなかった。

4. 第58-3次調査（6 ACM-N）

調査場所 明和町斎宮字広頭・竹川字東裏

原 因 斎宮小学校校庭整備

調査主体 明和町教育委員会

調査協力 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和60年7月29日~8月3日

調査面積 203m²

1) はじめに

斎宮小学校の校庭整備に伴う事前の発掘調査である。学校用地18,825m²のうち、昭和52年の第15次調査以来既に、4,295m²にわたって調査が行われており、奈良時代~室町時代までの各種遺構が検出されている。今回の調査は小学校用地内の広い範囲にわたり、21ヶ所のトレンチを設定して合計203m²について実施した。

2) 調査概要

バックネット・防球ネット設置予定部分（fig. 6 A~C）は校庭東南隅にあたる。検出した主要な遺構は北部と東部に限られ、中央のバックネット部分については、90~110cmの深さまで擾乱されて遺構は残存していない。北部では鎌倉時代前半の土塙S K4266と室町時代以降の東西溝SD4267・SD4268が、また、西部には鎌倉時代の南北溝SD4270のほか、時期不明の土塙S K4269を検出した。出土遺物は、鎌倉時代土師器鍋、山茶楓、室町時代以降の土師器鍋・皿、陶器鉢・

58-3次

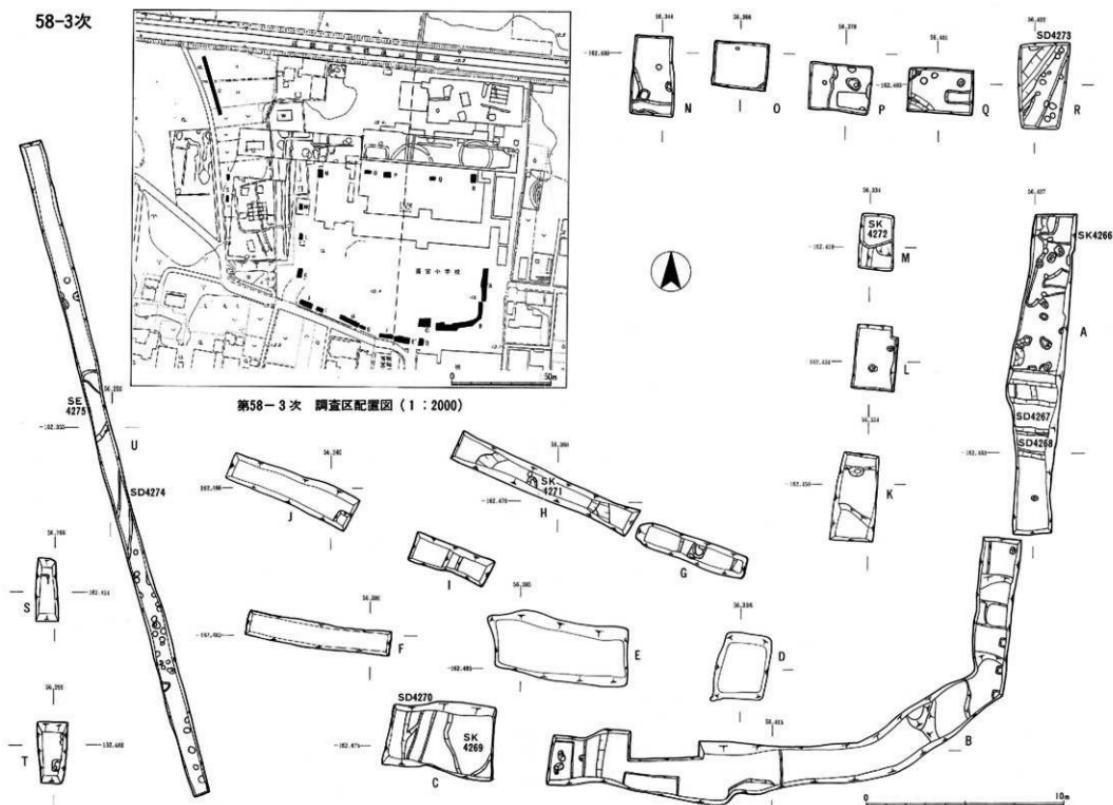


fig. 6 造構実測図 (1:200)

皿などがある。校門設置予定部分(fig. 6 D・E)は東部では深さ80cmまで擾乱を受けており、遺構は残存しない。西部部分(E地区)では一部擾乱されているが、その他の部分でも遺構は存在しない。出土遺物はない。

校庭南側溝設置予定部分(fig. 6 F~J)については、幅1.2mのトレンチを6ヶ所東西に設定した。このうち遺構を検出したのはH地区とG地区的両トレンチで、H地区では奈良時代後期の土師器杯・皿・甕・高杯と鎌倉時代後半の常滑窯が出土した土塙S K4271が、G地区では時期不明の小穴と土塙を検出した。校庭西側溝設置予定部分(fig. 6 K~M)では3ヶ所設定したトレンチのうち、M地区では奈良時代後期の土師器杯・甕が出土する土塙S K4272を検出した。小範囲のため明らかではないが、あるいは堅穴住居になるかもしれない。

校庭北側溝設置予定部分(fig. 6 N~R)では5ヶ所設定したトレンチのうち東端部分のR地区では幅90cm、深さ50cmの溝S D4273を検出した。この溝は昭和52年度実施した校舎部分の調査でみつかっている円形周溝を切って南に延びる南北溝の一部と考えられる。N~Q地区からは土塙、小穴が検出されているが、時期は不明である。このうちP地区中央部の扁平な自然石を置いた穴は、鎌倉時代前期の建物の柱礎形の可能性がある。出土遺物としては、奈良時代後期の土師器杯・甕、鎌倉時代擂り鉢、室町時代土師器鍋が包含層から若干出土した。体育馆西側溝設置予定部分(fig. 6 S~U)で検出した遺構は井戸1、溝1のほか小穴が多数あるが、柱礎形と考えられるものは少ない。井戸S E4275は径3mの比較的大型の井戸で、鎌倉時代前半の山茶碗、土師器鍋・皿、白磁が出土した。他の遺構の時期は明らかではない。

5. 第58-4次調査(6ABL-A)

調査主体 明和町竹川字中垣内473-1

原 因 盛土

調査主体 明和町

調査担当 三重県立古跡調査事務所

調査期間 昭和61年1月16日~2月6日

調査面積 190m²

1) はじめに

調査地は、宮城西部の標高13.8mをはかる台地縁辺部であり、龍川の沖積平野に面した位置にある。かつて、三彩陶器が出土した第30次調査区より西へ約200m離れた地点である。

L字状のトレンチを設定して190m²にわたり調査を実施した。

58-4次

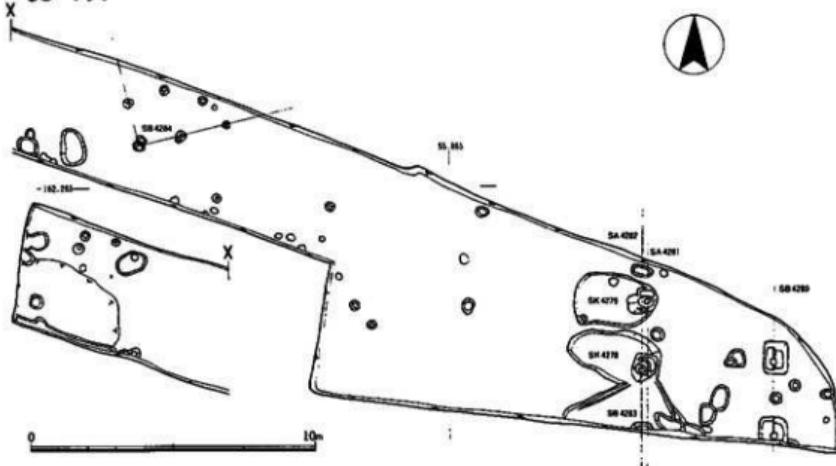


fig. 7 遺構実測図 (1 : 200)

2) 調査概要

調査の結果、東部からは、弥生時代前期の土塙 S K4279・S K4278、弥生時代中期の竪穴住居 S B4283、飛鳥時代の柱列 S A4281・S A4282、掘立柱建物 S B4280、また、西部から時期不明の掘立柱建物 S B4284を検出した。

S K4278は、 $3.3\text{m} \times 1.8\text{m}$ 深さ15cmの、S K4279は、 $2.8\text{m} \times 1.8\text{m}$ 深さ20~30cmの東西に長い横円形土塙で、ここから、弥生時代前期の壺・甕など比較的まとまった遺物が出土しており、付近の同時期の遺跡である古里遺跡-D地区、金剛坂遺跡出土の弥生土器とはほぼ同様のものと考えられ、前期終末（畿内I様式の新段階）に比定される。

竪穴住居 S B4283は、調査区外へ広がるため、全容は明らかでないが、東の1辺は 3.5mで方形を呈するものと思われ、まわりには周溝がめぐるが、柱穴は検出されていない。床面から、弥生時代中期の壺の破片（口縁部）が出土している。

台地端部からおよそ50m東へ入った調査区東端部で検出した、南北方向3条の柱列については、ここでは一応西部にある建て替えられた2条の柱列を壠とし、東へ 4.5m隔てて平行する大型柱列を掘立柱建物とした。S B4280の柱掘形が $1.1\text{m} \times 0.8\text{m}$ ときわめて大きく、柱間も2.55mもあることを注目したい。なお、S A4281・S A4282の柱間寸法は2.4mである。

これら3者の時期については、S A4282の柱掘形から低い立上がりのある小型の須恵器杯身のほかは、土師器杯・甕の小片が出土しており、7世紀中葉から8世紀中葉までの広い時期を

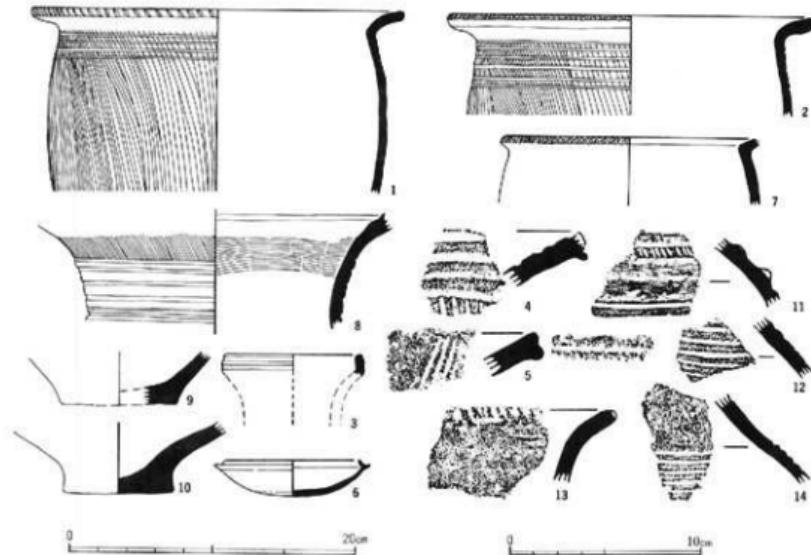


fig. 8 遺物実測図 (1 : 4)
SK4278; 1・2、SB4278; 3～5、SA4282; 6、包含層; 7～14、(4・5・11～14は1:3)

与えざるをえない。

しかし、ここで注目される事項は、これまで古里および中垣内地区で検出されている奈良時代建物の方位が、いずれも北に対して東や西に相当大きくふれているにもかかわらず、今次検出のこれら3つの柱通り方向が、N1°Eとよく方位にのり、柱掘形が大型である事実である。周辺の調査に期待するとともに、今後の調査課題とした。

SB4284は径30cmほどの円形の柱掘形をもつ時期不明の建物で、総柱建物になる可能性もある。

6. 第58-5次調査 (6ADQ-Q)

調査場所	明和町斎宮字牛葉地内
原 因	町道掘溝新設
調査主体	明和町
調査担当	三重県考古調査事務所

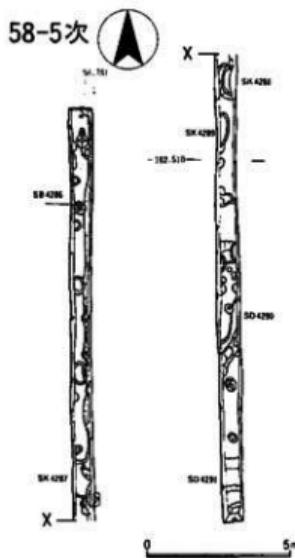


fig. 9 造構実測図 (1 : 200)

調査期間 昭和61年2月25日～2月27日

調査面積 22m²

1)はじめに

調査地は、近鉄斎宮駅の南側の旧参宮街道とを結ぶ町道である。標高は約12m。

東へ約50m離れたところで、昭和55年度に、第31～4次調査（百五銀行斎宮支店）が行われており、旧参宮街道に近い攪乱された南半部をのぞくと、遺構の密度は相当濃密で、宮内でも建物の建て替えが多い重要な一面であると考えられている。

南北30m、幅0.7m面積22m²について調査した。

2)調査概要

遺構検出面は、地表から北部で0.8m、旧参宮街道に面する南部では相当の整層があり、1mに達する。

調査区が幅70cmと狭いため、建物としては、平安時代後期の建物1棟（SB 4286）を確認できたにとどまる。ほかには、平安時代前期の土塙S K4288、平安時代後期の土塙S K4287・S K4289、溝S D4290、室町時代以降の溝S D4291を検出している。

土塙S K4288・S K4287・S K4289は、いずれも調査区外へ広がるため、全容は不明である。

S D4291は東西溝で、幅2m以上、深さ0.7mあり、溝の埋土中より室町時代以降の土器が少量と木片が出土した。旧参宮街道とは重複しているため、全容を明らかにできない。

包含層と建物としてまとまらなかった柱穴から綠釉陶器2点が出土している。

7. 第58-6次調査 (6ADR-U)

調査場所 明和町斎宮字木葉山131-3

原因 農業用倉庫の新設

調査主体 明和町

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和61年2月27日～3月20日

調査面積 522m²

58-6次

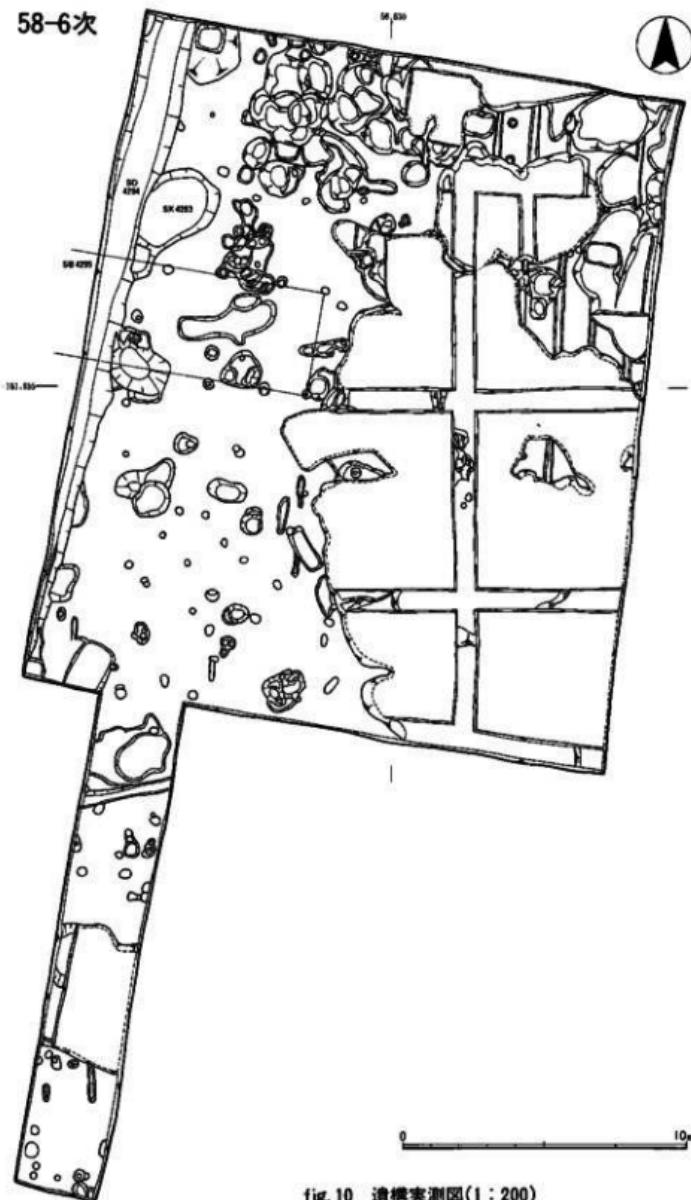


fig. 10 造構実測図(1:200)

1)はじめに

調査地は、牛葉地区の旧参宮街道の南側で、史跡指定範囲の南辺に位置し、昭和59年度に実施した第53-11次調査の北西に隣接する標高12.3mの畠地である。第53-11次調査では、奈良時代の掘立柱建物、竪穴住居などが確認されている。

東西19m、南北24mの面部分に、さらに、南に幅3m、南北18mのトレンチを設定し、調査を実施した。

2)調査概要

調査区東半を中心とする大半の部分には、近世～近代陶磁器、瓦などを多量に含む大規模な擾乱土塚が広がっており、大半の遺構は削平されていた。

遺構はわずかに調査区西半で確認され、奈良時代の土塙SK4293、平安時代末期の溝SD4294、そのほか、掘立柱建物SB4295がある。

SB4295は、(4)間×2間の東西棟で、桁行柱間は東端をのぞいて2.0m、東端のみ1.6mを測る。柱穴は、径30～40cmの円形を呈するものである。しかし、柱穴中に遺物を含んでいないため、時期決定しがたいが、SD4294に柱穴が切られているため、平安時代末期以前と推測される。

SD4294は、N14°Wの南北溝で、幅1.6m以上、深さ60～70cmのしっかりしたもので、今後の調査により、その性格などの解明が期待される。

遺物としては、SK4293、SD4294に伴う奈良・平安時代の土器のほか、綠釉陶器1点、また、前述した近世～近代の多量の遺物がある。

以上のように、今回の調査地は、第53-11次調査とは様相が異なり、調査区のかなりの部分が擾乱されており、この擾乱はさらに南側へ続くものと思われる。

8. 第58-7次調査 (6AGS-G)

調査場所	明和町斎宮字中西611
原因	個人住宅改築
調査主体	明和町
調査担当	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和61年3月22日～3月27日
調査面積	66m ²

1)はじめに

調査地は、中町地区の旧参宮街道の南側で、これまで、あまり調査の行われていない部分で

ある。標高は 9.9m。

幅約3.5m、南北19mのトレンチを設定し、66m²について調査を実施した。

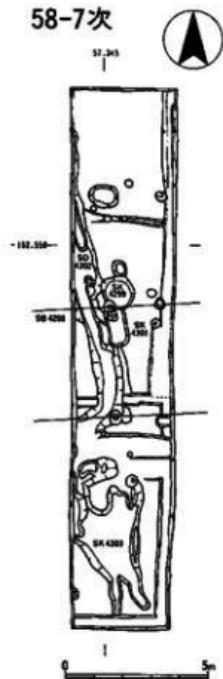
2) 調査概要

小規模な調査であったが、掘立柱建物 S B4298、鎌倉時代の土塙 S K4299・S K4301、室町時代の土塙 S K4303と近世の溝 S D4302がある。

S B4298は、柱穴内に遺物を含んでいなかったが、S K4299、S K4301に切られているため鎌倉時代以前のものと考えられる。

ほかにも柱穴と考えられるものもあるが、建物として把握できなかった。

58-7次



9. 第58-8次調査 (6 ABM-A)

調査場所 明和町竹川字中垣内430-3他

原 因 近鉄保全橋新設

調査主体 明和町

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和61年3月27日～3月29日

fig. 11

調査面積 21m²

1) はじめに

近鉄の保全橋新設に伴う事前調査で、県道南藤原・竹川線のすぐ西側の部分である。標高はおよそ13.3m。

工事立合いの際、工区内2ヶ所で遺構の存在が確認されたため、その部分の取扱いについて、近畿日本鉄道・明和町・斎宮跡調査事務所の三者間で協議を行い、急振調査を実施したものである。

2) 調査概要

調査区が幅30cm前後と狭いため、検出した遺構の性格等については速断できないが、調査面積に比し、多くの遺構を検出した。

おもな遺構としては、弥生時代後期の土塙 S K4308、飛鳥時代の土塙 SK4307のほか、室町時代の土塙 S K4306がある。いずれも規模は調査区外に広がり不明である。

ここでは周辺の状況を知る手がかりを得るにとどまった。

58-8次

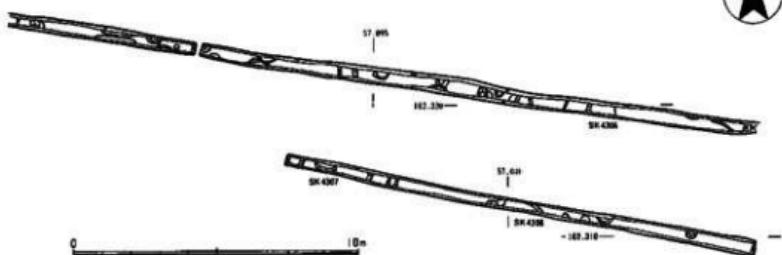


fig. 12 造構実測図 (1 : 200)

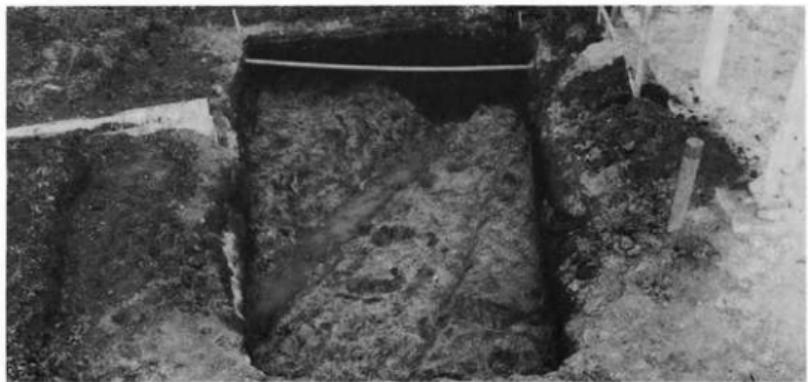
図 版



上: 第58-1次全景 (南から)・下: 第58-1次 (北から)



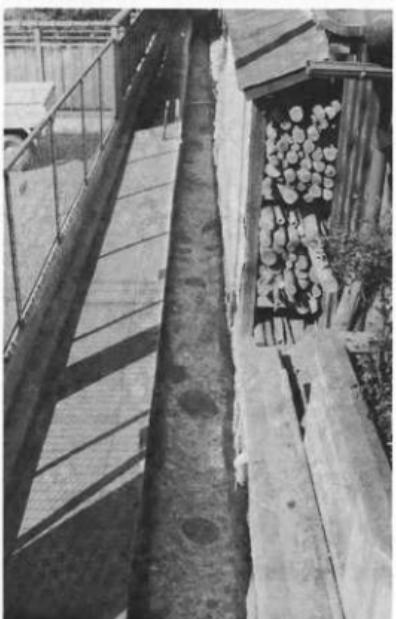
上: 第58-2次全景(北から)・下: 第58-3次H地区(東から)



上;第58-3次A地区(北から)・下;第58-3次B地区(南から)



上; 第58-4次全景(東から)・下; 第58-4次 S A4281・S A4282・S B4280(北から)



上:第58-4次SB4280(北から)・下左:第58-5次全景(北から)・下右:第58-5次全景(南から)



上: 第58-6次全景 (北から)・下: 第58-6次西半部 (北から)



上;第58-7次全景(北から)・下;第58-8次調査風景(東から)

史跡斎宮跡
昭和60年度現状変更緊急発掘調査報告

昭和 61 年 3 月 31 日

編集 三重県斎宮跡調査事務所
明和町
発行 明和町
印刷 光出版印刷株式会社

本書は、明和町及び三重県斎宮跡調査事務所の許可を得て、斎宮研究会(代表服部貞蔵)が増刷したものである。

